

<http://jfn.josuikai.net/circle/soccer/>

平成25年度東京都2部リーグ
(前年度)

成 蹊	(1部8位)
大 東 文 化	(1部9位)
玉 川	(1部10位)
上 智	(2部3位)
日 大 文 理	(2部4位)
首 都 大	(2部5位)
武 蔵	(2部6位)
一 橋	(2部7位)
日 大 生 資	(3部1位)
学 習 院	(3部2位)

そこで、今年はオフ期間中から週二日で部員

がグラウンドに出て運動量を確保するようなシステムにしたり、シーズンインの時期を例年よりも早くしたりするなど、スタート時点から早く始まる本番を意識して活動しています。

当然戦術面など他にも例年より早い準備が必要とされる要素は盛りだくさんです。簡単なことではないですが、チーム一丸となってこの難題を乗り越え、「一部昇格」を果たしたいと思っています。応援して下さいますOB・OGの皆様のためにも頑張っていきたいと思いますので、どうか声援のほどよろしくお願い致します。

るために思い立ってしまった私は、大きなリュックを背負って一人であの国に乗り込みました。日本で最も信頼されている書籍「地球の歩き方」に、「夜は外を歩かないでください。どうしても歩くのなら、男性は殺されるかもしれない、女性は強姦されるかもしれない」を覚悟してください」と書いてあるあの国に。

替え戦、5位以下になった場合は他リーグの下のチームとの入れ替え戦、これを何としても避けなければと日夜考えておりました。結果は何と「史上最弱チーム」が東京リーグ一部で4位になったのです。私は入れ替え戦を前に、本当に良かったと胸を撫で下ろしました。内野さんの指導も勿論ですが、東京リーグ一部に残れたのは、3年生の部員が必死に頑張ってくれたことが第一で当時の部員の皆さんには感謝の気持ち以外には言葉がありません。当時のことをたまに振り返るときは、今でも胸が熱くなります。

現在私は、東武ストアの社長をしておりますが、卒業後に入社したのは丸紅です。商社と小売業は同じ商業でも仕事内容が全く異なります。商社は海外での商売が多いですし、一方、スーパーは完全なドメスティック企業です。入社の際に、まさかスーパーで仕事をするとはい予測できませんでした、これも学生時代の一番下手がグラマネを仰せつかるということと何か繋がっているかもしれません。世の中、人生、先の事は誰も分かりませんが、いつでもどこでも与えられたことを一生

さて西松会のいくつかのテーマの中で、今回はイベントを取り上げてみたいと思います。以前は、OBのイベントは、新春のOB戦と秋のシニアの東大戦ぐらいでした。昨年度は、これが6回まで増えました。OB戦、慶応・名古屋田戦、小平クリーンデー、神戸大戦、東大戦、東京ガス戦です。今年の目標は、これをさらに増やし、毎月開催に持っていくことです。本年度は、1月に東大との初蹴り、2月OB戦、3月シニア三商大と予定通り推移しています。イベントの内容をみ

一方シニアにつきましては、会社のサッカー部も40歳ぐらいで引退する人が多いです。そこから先は、ゴルフやテニスや、ランニングに転じる人、フットサルや、シニアチームに入って続ける人などのパターンになります。現在のシニアイベントは、この層に時々チームでボールを蹴る環境を提供し、旧交を温める場所を提供しています。子育てが一段落し、会社のサッカー部から卒業した人が、再びサッカーのある生活に戻る契機にもなっています。各自が無理のない頻度で、継続できるのが理想です。先日、東大OBと初蹴りで本郷に行きましたが、前の試合は65〜80歳のチーム同士でした。一橋もいつか混せてもらえたいですね。

若手とシニアが一緒に蹴れる場合は、OB戦であり、三商大です。三商大は、学生の試合とセツトで一日のイベントになっているため時間に制約があります。OB戦は、シニア、若手、学生が揃うイベントであり、時間の制約もなく貴重です。少しずつ親睦・懇親が図れるようにして考えてはいるのですが、まだまだ改善の余地があります。また、東大OBとは、今年初めての世代で試合ができました、次は3世代でやりたいところです。

イベントの今後ですが、家族のみで参加できるイベントができればいいですね。フットサルであれば、大人以外に年齢別に子弟の部でゲームができます。久しぶりに蹴る人やOG同士のゲームもいいですね。ボールを蹴らなくなった人も楽しめるようなイベント、家族連れで、1日楽しめるイベントをぜひ実現させたいと思います。

西松会がプロデュースするイベントが会員間及び学生との接点を増やし、より広く、深い人間関係を作る為の一助になればいいですね。本年度も宜しく願います。

代表幹事 倉崎 嘉幸（昭和57年卒）

戦いを終えて

「今、ここにいる 部員だけではなく」

「どうすれば1部昇格が出来るのか。」これを徹底的に考えた1年だった。試行錯誤をしながら自分なりに出した1つの答えは、「今、ここにいる部員だけの力では難しい」ということだ。この言葉には、2つの意味が内包されている。

1つは、現役部員以外の力を借りるべきであるという意味。具体的には、専門家やOB・OGの方々の力。「今、ここ」の現役部員だけでは知識的にも資金的にも力不足だ。

まず、前者。サッカーにおいて、心技体をバランス良く鍛えることが必要だ。現役部員が本やHPで情報収集をするだけでは、現状の課題にフィットし

勝ち負けの先にある「感謝」

大学4年間のサッカー生活を終えた今、私の思うサッカーの目的は勝つことであり、一橋大学ア式蹴球部は勝つための集団であると感じています。これは勝ち負け以外のすべてのことを軽視しているわけではなく、勝ち負けにたわる先に貴重な経験があると感じるという事です。

そして私にとってのこの4年間の勝ち負けの先は感謝でした。

今シーズン主将を任せていただき、ある程度、部の中心としていろいろなことに関わる中で、チームメイトの、そしてOB・OGの方々の多くの熱い想いに触れ、その気持ちに「1部昇格」という形で応えたいと本気で思えるようになりました。しかし、一人では何もできない頼りない主将で、本当に多くの方に支えられて乗り切った1年でした。大きなチーム愛を持ってサポートしてくれたマネージャー、コート内外で部を盛り上げてくれた後輩、ともにチームを引っ張ってくれた同期の仲間たち、そして、敵しくも温かく応援してくださるOB・OGの方々、保護者の方々、関係者の方々。多くの方に囲まれて過ごせたことを本当にありがたく思います。

また、私事ですが、3年生の時に母を亡くしました。その時期は実家に帰ることも多く、部にいる時間も非常に少なくなりました。しかし部に戻れば皆、普段通り楽しく接してくれて、OBの方々からもたくさん声をかけていただき、この部が自分にとってかけがえのない場所だと感じるようになりました。個人的にもその年の「2部昇格」のための練習の雰囲気は嫌なことも忘れてがむしゅらにサッカーに取り組めるものでした。

た情報を得て具体的な施策をし、効果を出すことは難しい。であるならば、自分達で明確にした課題に対する専門家の教を咀嚼する方が、効率的で且つ有効ではないか。

今シーズンは、「体」分野において、日本サッカー協会アスレチックトレーナーの並木氏を招聘したり、「技」分野において、赤星監督に戦術面でのアドバイスを多く頂いたりしていた。来シーズンは、「心」分野においても専門家に協力を依頼する予定だ。

また、OB・OGの方々と、より強固な協力体制を築いていく必要がある。これまでは現役側の取り組みが乏しかったように感じる。多くの寄付金を出して頂いているからこそ私達の活動が可能になっているにも拘わらず、感謝の気持ちを表す場面は秋季リーグでの活躍くらい。

今シーズンはより試合を楽しんで頂くために、公式戦時の選手紹介シートや、小平通信での試合評戦さらには現役の活動報告としてイヤーフックの作成を行った。現役がOB・OGの方々に働きかけて、相互の意思疎通を図り、現役だけでは出来ない大きな

私がこのように感謝の気持ちを持つことができ、この部で過ごした4年間を素晴らしい時間だったと思えるのは、現役部員はもちろんのこと、OB・OGをはじめとする多くの方々が、チームの勝利に対する熱い想いを持っている部だったからです。だからこそ私もサッカーに熱くなり、この部からたくさんこのことを学ぶことができたのだと思います。

と、ここまで私の中で多少美化された話をしましたが、今シーズンの結果は7位に終わり、1部昇格を逃しました。やはりサクルでなく部として活動する以上、常に勝ちにこだわらなければならぬと思ひますし、今年は悔しいシーズンでした。この悔しさを後輩たちに是非晴らしてもらいたいし、今後はサッカー部OBとしてチームの勝利のために、皆様とともに部に関わっていききたいです

最後になりましたが、4年間本当にありがとうございました。これからもよろしくお願ひ致します。

上塘 春生（主将 4年）



勝ちたいと本気で 思わせてくれた場所

私は小学校1年からサッカーを続けてきました。高校まではチームとしても個人としてもこれといった記録のない平凡なサッカー人生でしたが、精一杯やったという事実に満足してきましたし、結果に至

取り組みを行っていくべきだ。

意味の2つ目は、先輩から後輩への引き継ぐべきであるということ。つまり、「今」ではなく「来年」の部員のためという視座の必要性だ。どの体育会も最高学年は1年しか活動できない。だから、4年生は毎年「今年こそは」と意気込む。しかし、問題点が2つある。

1つは、1年間で出来ることには限界があるということ。もう1つは、その年の強さが属人的な要因に規定されてしまうこと。だから4年生は、後輩に何を伝えれば彼らが来シーズンより強くなれるかという視点を強く持たなければならぬ。注意したいのは、そのシーズンの目標には全力でコミットするという前提の存在。でなければ、後輩に伝えることなど二つもない。

今シーズン、私は本気で昇格が出来ると思ってた。しかし結果は7位。「悔しい…」この一言に尽きる。後輩達には、「今、ここ」にいる部員以外へと視野を広げつつ、悲願を達成して欲しい。

平林 幸治（GM 4年）

る過程が大事だからと自分の中で整理してきました。しかし、大学サッカーにおいてこれまでは全く異なる考えを持つようになりました。1年、2年とあと一步のところで昇格できないというシーズンを経験し、「結果の持つ大きな意味」を知りました。そして3年時に2部昇格を果たし、さらにそれを強く思い知らされました。昇格できないは全てを否定され、昇格すれば全てが正しいとされる形です。

4年になると、結果に対するこだわりはさらに強くなりました。副将という立場に立ったことで共に戦ってきた仲間、先輩、後輩、応援してくださるOBの方々の想いに触れる機会が増えたからです。その想いにどうしても応えられなかった。だから、周りからの厳しい意見もありましたが、本気で1部昇格を目指しました。しかし、結果は7位と不甲斐ないものでした。昇格の可能性が消えた東総戦の悔しさを忘れることはないと思います。

ただ、今は結果が出なかったからといってすべてが無駄になったとは思っていません。結果にどんなことだったからこそプロセスが大きな意味を持つたと、そう考えています。勝った時の喜び、負けた時の悔しさはこれまでの人生で味わったことのないような大きな感情の動きでした。このような感情を抱かせてくれた一橋大学ア式蹴球部に、私は心から感謝しています。そしてこの組織の一員となれたことを誇らしく思います。今後は、この想いを何らかの形で部に還元していきたいと思っています。

最後になりましたが、いつも多くの声援をくださったり、幾度となく現役の活動を支えてくださったOBの皆さま、誠にありがとうございました。西松会の一員としてこれからも何卒よろしくお願ひ致します。

彦坂 達哉（副将 4年）

意義あつた4年間

OB・OGの皆様、日頃のご支援ありがとうございました。全体を俯瞰する立場になってようやく、OB・OGの皆様・直近の先輩方・親などに守られてきた事を強く感じます。

僕はサッカーが好きです。物心ついた時からそばにあり、人生のどんなシーンでも一番近くにあるものでした。引退し、本気でサッカーをする場はなくなりまして。変化といえはお酒を飲んで徹夜してもお咎めがない事くらいですが、やはりサッカーしている人を見ると体の底からエネルギーが湧きでてきます。ちょっとした面白い人を見るとコイツのドリブルは止められるかな、と真剣に考えたりします。基本的に止められるという結論に落ち着きますが。

目標未達も大きな財産

今年度は主にフォワードとサイドハーフでプレーをしていた北川雄介と申します。まず始めに、本年度も温かいご支援ご声援ありがとうございました。実際に試合を見に来て下さった方々はもちろん、支援のかたちはいろいろあると思いますが、OBの皆様のお力添えが私たちの大きな力となり、一時は1部昇格も目前というところで登りつめ、大健闘できたと思っています。

私は大学に入ってからサッカーを始め、4年間続けたましたが、そのうちの約2年間は半月板の損傷などで思うようにサッカーをすることができず、振返ることも悔しいものであったと思っています。

今シーズンは、「1部昇格」を目標として辛い練習を行い、肉体的にも精神的にも非常に厳しいシーズンでしたが、具体的な目標をもって練習に取り組めたので、非常に有益な時間を過ごすことが出来ま

「ありがとう」って伝えたくて

1年間、様々なことがありました。天皇杯1回戦敗退、春季最下位、昇格が見えてからの3連敗。でもこのことについてはグラマネやキャプテンが書いてくれると思うので僕はサッカー以外について書こうと思います。

僕は中高とサッカーをしておらず、大学からサッカーを始めました。なんでサッカー部に入ったのかそれはもちろんサッカーが好きだったからもありますが、実際は先輩の方々にあこがれたからです。そんな先輩方が輝いていたのが飲み会であり、飲み会中いつもテカってる先輩や、いじられても何も言わない先輩、すぐ服を脱ぐ先輩などみなさんキャラが濃くてとても楽しかったです。そんないつもふざけていて面白かった先輩の方々が、サッカー、と

振り返ると、大学サッカー部に入ったモチベーションは恐らく周りとは大きく違ったと思います。それを満たせず、サッカーを楽しむなくなった事も何度もありましたが、辞めずに最後まで続ける事ができました。自分への覚悟やプライドという面もありましたが、一番大きかったのは年次の近い先輩方の存在でした。特に僕らの1つ上の代の方々は大好きです。ご迷惑おかけしましたが、ありがとうございまして。この場をお借りしてお礼申し上げます。

自分にとってサッカー部での4年間は人生にとって大きな意義があった期間でした。100のうち98くらいはあまりいい思い出ではないですが、この部に出会えて本当によかったと強く感じます。「主役性を持って関わる」という言葉にしてしまえば簡単な事が、ここまで実感できる集団は他にないと思います。自分の努力がそのまま反映され、かけたエネルギー

した。グラッドマネージャーの平林が「全員、全部全力で」というフレーズでチームの士気を底上げするだけでなく、今年は1年生もチームの輪にうまく入り込めるように取り組み、私がサッカー部に在籍した4年間の中では一番まとまりがあったと感じております。

確かに、結果としては2部残留という成績で終わってしまいました。しかし、結果と同等もしくはそれ以上のものを、この1年で得られた気がします。今までは結果がある意味すべてだと考えていた私にとっては、本当に大きな意識の変化で、今後の人生の大きな財産になることは間違いないです。

最後になりますが、私のサッカーライフはこれで終わりです。ですが、一橋大学サッカー部はすぐ来シーズンを迎えます。敵い試合が続くと思います。が、私自身は今でも先輩方、応援してくださったOBの方々からいただいたように何らかの形で後輩たちに返していこうと考えております。

北川 雄介（4年）

いつか部活に対してはともまじめで、そんな一つのことに対して熱く濃くなる姿がとても格好よくてあこがれました。

そして僕も年を取り4年生になり、格好よかった先輩たちのようになれるよう頑張りました。格好よかったかどうかは自分で判断することではないのになんとも言えませんが…。でもこの4年間の中で一番サッカーに対して燃えた1年間でした。今年が最後というのも有りましたし、僕が頼りにしていた相棒が不慮の事故でサッカー部から居なくなりそいつの分も頑張ると決めたからです。そいつのおかげでサッカーができる幸せというのを感じることができました。こうやって僕がサッカーを4年間続けられたのは周りの助けはもちろん、親やOBの方の援助無しでは語れないと思います。4年間とてもお世話になりました。ありがとうございまして。

谷 圭祐（4年）

が感情として丸々跳ね返ってくるようなグラウンドでした。気づけば18年間サッカーをしてきましたが、収穫のある終わり方ができました。この部に関わる全ての人々や環境に感謝しております。

最後に、西松会担当・イヤーフック担当を経て感じた事です。西松会員同士・現役間の交流をもっと増やしていけたらいいな、と考えております。記憶からスッパリ抜けてしまった方も、忘れられない思い出がある方も、西松会というつながりを通じて自由で活発な交流をしていきたいので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

桂 怜人（4年）

充実したシーズン

昨シーズン、念願の2部昇格を果たし、今シーズンは現役部員全員が初めてとなる2部という舞台で戦ってきました。今シーズンのチームは、GMとキャプテンを先頭に4年生がチーム全体を引っ張ってくれて、これまで以上に向上心を持って努力し成長することができたと思ひしています。「昇格」という目標は達成できませんでしたが、このチームの雰囲気は必ず来シーズンにつながり、良い結果をもたらしてくれると思ひます。

プレイヤーが所懸命に頑張っている姿に刺激を受けながら、私たちマネージャーも日々成長してきました。マネージャー全員で情報共有し、意見を出し合い、高め合っていました。これまでと同様に練習や試合でやる業務を欠かさずこなし、より良いものにしていくことはもちろん、新たに「コンディショニング管理」という仕事を任せました。また、部員の投票による「オフェンス賞」「ディフェンス賞」の表彰も行いました。これらを通して、マネージャーには、既存の業務をより良いものにしていくというだけでなく、またできることがあるということに気づかれました。私は引退してしまいましたが、伝えたいことはすべて伝えました。後輩たちがこれまでの先輩方の意志を受け継いで、チームをサポートしてくれることを祈ります。

私は、東京都大学サッカー連盟の学生幹事としても活動しています。学連では、1部2部と3部4部が分けられて議論されることが少なくないため、これまでは自身の狭い思いをしてきました。私の個人的な思いだけではなく、やはり2部と3部では扱いが大きく違います。昇格を目標にすることはもちろんですが、降格は絶対にしてはくありません。前後期制となる来シーズン、学連としても一橋サッカー部としても初めての事です。私は来シーズンの学連に所属していますので、一橋サッカー部の運営を、裏から支えていきたいと思っています。

最後に、現役を支援してくださるOBやご父兄の皆様、本当にありがとうございました。来シーズンも応援よろしくお願ひいたします。

小林 茜（マネージャー3年）

リーグ戦観戦記

東京都2部秋季リーグ戦9試合を5年振りに戦った現役の試合の観戦記を報告しておきたい。

1. 序盤戦（手ざぐり）：

第1節（8／26）～第3節（9／9）

帝京戦（国学院・人工芝G）は相手が強豪だったこともあるが、やはり初戦特有の固さがあり、思うような組立ができず守勢に回ることが多かった。

一橋は春からの堅守速攻で果敢に対抗していたが、結果は4－0と大敗であった。

もう少し守備重視で臨む戦法もあったが、自分達のスタイルを貫いた結果の敗戦であり、これが後の戦いに生きることとなった。

東経戦（小平G）は小雨模様の中で行われた。

前半2－0とリードされ、ハーフタイムに入ったが、豪雨によりグラウンドは湖のような状態になった為、試合は中止となり、再試合となった。

この試合も大敗していたら、流れが一気に悪くなる所であったが、救われた感があった。

成城戦（成城総合G・天然芝）は、序盤から成城にボールを支配され、苦しい時間帯が続いた。際どいシュートも何回か受けたが、成城のミスに救われた上、チームとして全体で良く凌いだことから、失点を免れていた。

そして、交代出場したケガ明けのMF彦坂（4年）が後半残りわずかの所でカウンターから得点した1点が決勝点となり、見事な勝利を挙げることとなった。

一橋は苦しい試合をものにしたことで、今後の戦いに希望を見出したのである。

平成24年度 東京都大学リーグ2部順位表

順位	チーム	勝点	試合数	勝	負	引	得点	失点	得失点
1	東 経 大	22	9	7	1	1	31	9	22
2	帝 京 大	16	9	4	1	4	19	11	8
3	上 智 大	14	9	4	3	2	15	11	4
4	日 大 文 理	12	9	3	3	3	17	15	2
5	首 都 大	12	9	3	3	3	10	13	-3
6	武 蔵 大	12	9	3	3	3	11	16	-5
7	一 橋 大	12	9	4	5	0	12	19	-7
8	日 大 商 学	9	9	2	4	3	10	13	-3
9	創 価 大	8	9	2	5	2	8	21	-13
10	成 城 大	7	9	2	6	1	15	20	-5

2. 中盤戦（波に乗る）：

第4節（9／16）～第7節（10／7）

創価戦（創価G・人工芝G）はFW竹本（1年）の先制ゴールで先週の勢いを継続したかと思われたがその後、ミスもあり立て続けに失点し、逆転されてしまった。

しかし、前半終了間際にMF金田（1年）のゴールで同点に追いつき、後半にFW荒牧（3年）の決勝点により逆転勝ちを収めたのである。

この勝利により、チームとして波に乗ることができたものと思われる。

上智戦（小平G）は、またもや雨天中止へ。

武蔵戦（武蔵G・人工芝）は一進一退の中、前半に失点したが、後半立ち上がりのOGで同点に追いつくと、終盤にMF小島と金田の1年コンビにより決勝点をもぎとり、3連勝となった。

日大（商）戦（小平G）は3連勝の勢いの延長線上にあり、スコアは1－0であるが一橋ペースを進められた唯一の試合ではなかったか。

DF大倉（3年）があげた1点を守りきり、4連勝と勝点を12に伸ばしていた。

このまま行けば、1部昇格もあり得るのではという期待が膨らんだ時期であった。

3. 終盤戦（躍き）：

第8節（10／14）～第9節（10／21）

日大（文理）戦（小平G）は、日大にとっては残留がかかった重要な試合であった。

基本的にロングボールを蹴り込んでくる一橋の不得手とする戦法はあまり、常に先手を取られる苦しい戦いを強いられた。

前半を1－1で終え、後半も1点を勝ち越されが直ぐに金田がPKを取り、同点のチャンスを得たが金田自身が蹴ったボールは無情にも右にそれ、ペースをつかみ損ねた。

それでも、交代の切り札になっていたFW上塘（4年）が、74分にDF平林（4年）からのアシストによりゴールを決め、同点に追いついたが、直ぐに突き放され、試合終了。

ここを最低でも引分で終えておけば好調の流れをまた食い止めておけたものと思われるが、本当に残念な敗戦であった。

首都大戦（首都大・天然芝G）は結果的に不戦敗となった。

一橋はエンジのユニフォーム、首都大は青のユニフォームで戦う予定であったが、当日の主審から汗をかくて濡れた場合に判別しにくくなるため、どちらかアウエー用のユニフォームを使うよう提案があった。現状のルールでは2種類のユニフォームを持参することが義務づけられていたが、一橋はアウエー用のユニフォームを持参していなかった。

首都大も同様に揃わなかったのであるがこの場合、前年度の下位チームの方に不戦敗が与えられるルールが適用された。

4. エピローグ（最後は力及ばず）：

再試合（10／28、11／1）

それでも、雨で延期となった2試合に連勝すれば2位になり、昭和56年（1981年）以来32年振りに一部昇格となるビッグチャンスを自力で掴めることになった。

優勝決定済の東京経済（小平G）に対して、意欲的に試合に臨んだが、チームの要である平林が前半17分で負傷交代する不運に見舞われてしまった。

その後、ペースをつかめない中、前半で2失点を献上することとなった。

それでも、後半63分に荒牧が得点し、1点差に迫ったが、直ぐに突き放され、そして終了間際に竹本が1点を返したものの時差で2－3で敗れてしまった。

これで自力昇格はなくなったが、最後の上智戦に引分以上で昭和62年（1987年）シーズン以来26年振りの2部3位という地位が得られるチャンスはまだ残っていた。

上智戦（埼玉スタジアム・第4G・人工芝）は、上智（現時点で勝点11）も勝てば3位になることからモチベーションが高く、お互いに勝利を目指したが、やや上智に分があり、前半1点をリードされた。

それでも後半75分にMF中村（3年）の今リーグ戦初得点になる渾身のシュートが決まり、同点に追いついたのだが、このまま引分かと思われた時の87分にまさかの勝越しゴールを奪われ、もはや追いつくことができなかった。

この結果により、勝点12で4チームが並んだが、一橋は得失点差で7位に終わった。

上位リーグの結果次第では降格の可能性もあったが、結局は残留となった。最後は際どい状況に追い込まれたのは事実であった。

5. リーグ戦の総括

①3位の上智（勝点14）から10位の成城（勝点7）まで力の差はほとんどなく、ほんの少しの差で勝敗が決まるといふ、実力伯仲の混戦状態であった。

その中で、4連勝できたことは、チームにとって貴重な成果となった。

②しかし、不戦敗を挟み4連敗したことは、その力がまたまた本物になっていなかったように思われる。

③平林GMや上塘主将を中心とした4年生の指導により、4年振りの2部での戦いであったが、チームを戦える状態に持てつけたのは、見事であった。

④1年生では、全試合にフル出場した金田がボランチとしてチームの心臓部となり、重要な役割を果たしたことは特筆できる。

チーム最多（3点）の得点を記録した竹本やゴールマウスを守ったGK後藤、右MFで活躍した小島や他の1年生の来年度の一層の成長が期待される。

⑤そして最後に、赤星監督には、本当にお疲れ様でした。

6. 今後の課題

①来シーズンは春・秋の2回戦（18試合）の体制になることから、選手層の薄い一橋には春に苦戦が予想されるが、その課題に早くから準備してもらいたい。

②試合に出る選手はもういっ、やはりベンチで応援する控えの選手達や女子マネ達とのチーム一体となった戦いが継続できるかが重要な課題となる。

③一橋は学生主体の運営でやってきた訳であり、恐らく今後その姿勢は変わらないと思うが、チームコンディションをベストにもっていくために、創意思士夫を尽くすことは、今後の社会人生活に大きな財産となっていくものと思われる。

来年度の活躍を大いに期待すると共に、OBの皆様には現役に対する引続きの支援と暖かい応援をお願いしたい。

特に、グラウンドに関連する環境改善には、関心を持っていただきたい。

安部 裕二（昭和52年卒）

サッカーと係った社会人生活

5号に引き続き神代祥男氏の回顧です。

昭和51年7月に宇都興産新潟営業所に所長として赴任しました。この年の高校総体のサッカー競技は新潟市で行われました。山口高校で教師をしていた同級生に応援の依頼を受けていました。山口県代表として出場した山口高校はなかなか強いチームで、3回戦まで進んでいました。

が、私にとって恵まれたことは、会場であった新潟工業高校の教師をしていた浜村哲郎先生の面識を得たことでした。総体を終わってから何かにつけサッカー競技のグループの一員として呼び出してくれたのです。

新潟での勤務は予想に反して極めて短く1年と4ヶ月で異動となりましたが、年齢相応にサッカーと付き合つことができました。

異動で辞令を貰ったのが「ガルフセメントプロジェクト」の総務班長というものでした。アラブ首長国連邦（UAE）のラスアルハイマーに年産100万トンのセメント工場を建設し、さらにマネージメントも請け負つたものでした。東京に暫定的な勤務場所を決め、準備に入りました。

このわずかな期間に、サッカーと大きな繋がりが出てきました。当時、同級生で東京農大の監督をしていた内田計手君（後に同校の理事長に就任）の推薦もあって「四十雀クラブ東京」に加入したことでした（紆余曲折はありますが、現在でもこのチームの一員です）。UAEでは土木工事は下請けに大成建設を、据付工事には台湾の業者を使うことで円滑に進行し、無事に

「大好きという気持ち」

サッカー部に入つて、私は大学入学前に思い描いていたものとはかけ離れた大学生活を送ることになりました。休みの日も朝早く家を出て、暑くても寒くても駆けずり回り、部活後は髪の毛はぼさぼさ、顔は泥だらけ、爪の間は土で常に茶色くなり、友達と遊ぶことも頻繁にはできません。これらのことになぜ耐えられたのか、それはサッカー部が本当に大好きだったからです。

入部のときも、「サッカー部の雰囲気が好きだから」という理由で決めましたが、サッカー部に対する思いは目を追うごとに大きくなりました。私が見てきたサッカー部の人たちは本当に熱い人たちがばかりでした。OBの方々は、小平グラウンドでの試合はもういっ、アウエーでの試合にも応援に来くたさう、熱い声援を送ってくたさいました。プレーヤーは、暑い日も走り練をこなし、プレー中も真剣な声飛び交い、

建設工事は完成し、マネージメントチームに引き継がれました。

現地では学部と大成のスタッフがほぼ同数というところもあって、スポーツの交流が春と秋、年に2回行われました。種目は「硬式テニス」「サッカー」「バレーボール」「フリースタイル」「卓球」と多種目にわたりました。コンサルタントの人たち（英国人）が、この7～8月は「地獄の季節」といいましたが、よく耐えたものと思います。

偶然のことながら、建設工事が完全に完了する前、昭和56年秋に新しい仕事に就かために帰国しました。「社長室企画部」という部署に2年弱勤務しました。この間に、四十雀クラブの試合、小平の練習、一橋OBチームの試合などにお付き合いをしました。

昭和58年6月から勤務したテレビ山口では役員として総務局長を1年、報道制作と技術の管理役員として10年、合わせて11年間お世話になりました。昭和60年2月には満55歳で宇都興産の定年となりました。以後64歳で任期が満了するまで勤めたということになりました。

昭和60年の4月末から5月初めにかけて、四十雀チームは5年に1回の鹿児島遠征に出かけました。「山口からは近いから君も参加を……」と呼び掛けられましたが、この時は鹿児島と宮崎県都城で試合をしました。この時はテレビ局に取材と放送をしてもらいました。これはチームのメンバーも驚いたようでした。

このことがあったからでしょうか。翌年には広島と山口に遠征するとの連絡が入ってきました。この時には山口には相手になるような40歳以上のチームがありませんでした。そこで山口高校が昭和25年全国大会で3位になった時のキャプテンをしていた川上正治さん

長いミーティングをして試合に備えている。こうした姿はいつも私の気持ちを奮い立たせました。

中でも、一番私に影響を与えてくれたのはマネージャーとして一緒に戦ってきた仲間でした。レベルの高い仕事をこなすマネージャーと切磋琢磨した日々は、苦しいものであったと同時に、私に大きな財産を与えてくれました。監督のぼっしーさん、試合に応援に来てくたさる保護者の皆さまも含め、私はサッカー部に関わる人みんなのことが大好きでした。

現役のときにも感じていましたが、私の原動力は常に「大好き」という気持ちでした。大好きで、尊敬できるこのような仲間がいたから、私は途中で投げ出すことなく引退まで、そして引退後も、「一橋サッカー部の人間として生きること」を選択しました。これからも、サッカー部のことを忘れずに生きていくつもりです。だから、最後はあえてこう言わせていただきます。

これからもよろしくお願いします……！！

稲垣 文佳（マネージャー3年）

（故人）に相談して、チーム結成に向けて活動を始め、昭和61年に四十雀チームを迎え撃つようなチームが出来ました。山口市内の大殿中学校のグラウンドで試合を行い、終了後の交流会も和やかなものでした。

時代が移り変わって平成になっていましたが、県自体がサッカー競技に関心を持つようになり、陸上競技場の改修に手をつけました。この時に派遣されてきたのが久保田秀一さん（昭和37年卒）でした。以前から山口市の40歳以上のチームと係わりましたし、山口県協会の役員としても関係が続きました。

「全国健康福祉祭（ねんりんピック）」という催しが全国レベルで年に一回、各県持ち回りで開催されています。平成9年までは、サッカーは危険ということで種目から除外されていましたが、平成10年の愛知県大会から加入が認められました。山口県チームは「四十雀」と称して出場しています。私も平成11年の福井県（丸岡町）、平成13年の広島県（広島市）、14年の福岡県（Jビレッジ）の大会に参加しました。「ねんりんピック」でサッカー競技が取り上げられた最初から山口県チームが参加できたのは、山口市でのチーム結成が県内各地に波及していったことで、その各チームの60歳以上の者が一つのチームにまとまったことが要因だと思っています。

私は平成16年11月に「小脳破裂」という病気で45日間も入院を余儀なくされました。以後は競技することを止めています。残念なことです。が、病気には勝てないことを強く感じています。

というところで、関西西松会の年2回の会合と東京での西松会OB有志の会（年1回）に参加することを楽しみにしております。

神代 祥男（昭和29年卒）

還暦前後は人恋し

2012年12月29日(土)、「第2回大忘年会」が開催された。この忘年会は前年も開催され、ほぼ恒例開催の様相を呈してきた。



今回の参加者は以下のとおりの31名(前年は35名参加)

47年…宮内
48年…押本、矢尾板、矢野
49年…大江、大島、小山、杉山、高垣、古市、山崎

50年…内田(守)、遠藤、大久保
51年…阿部、木内、高橋、谷口、寺尾
52年…安部、土方、福本、古荘、村上、山根
53年…浅井、小林、佐藤(嘉)、田中
女子マネ…高橋(マリッコ)、佐藤(イモケン)
*49年の吉岡さんは遠路ロンドン(大阪経由)から東京まで来られたが、風邪による発熱のため、残念ながら忘年会には参加できずホテルでダウン。緒方さんともども残念。

今回は47年の宮内さん、48年の 矢尾板さん、矢野さん、そして49年の高垣さんが初参加された。当時グラマネだった宮内さんからはグラマネとしての苦勞話などが紹介され、山崎さんから「宮内さんのためならということと頑張れた」というフォローもされた。

遠藤さんからは宮さんのサッカー戦術に対する

る先見性が紹介されたり、佐藤さんからは世界の権力構造の変化の話があったりと、思い出を越える多彩な話題提供がなされた。

なお、忘年会の主目的である「還暦祝い」については対象となる5人から簡単な挨拶がされたが、ほば会を開催するための名目になっている気がしてならない。ま、いいか！

還暦前後の年代になると、会社内とは違って利害関係のない間柄が居心地がいいようである。忘年会も恒例開催になりそうな気配である。

尚、高松から高垣さん、大阪から高橋さん、名古屋から大島さん、古市さん、小林さん、そして山形からマリッコさんと遠くから参加してくれた皆様は、特にお疲れ様でした。今年から新会員となる村上さんも懐かしい顔でした。

FacebookやGoogleなどの交流サイトなどを利用してさらなる広がりを探ろうと考えているが、道具立てが十分でない現状も配慮して今後も検討していきたいと考えている。みなさんのご協力よろしくお願いします。

山根 言一(昭和52年卒)

サッカーの思い出

私は高校時代まで全くサッカーの経験がないまま、入学と同時に入部した。小平での厳しい練習には最初戸惑いがあったが、ボールを巧く蹴れるようになるに連れサッカーの面白さに惹かれていったように思う。3年生になってからハーフバックとして何回か試合に出してもらえようになり、三商大の関西遠征にも連れて行ってもらった。4年生になってから初めてレギュラーとなり、センターフォワードの定位置を確保した。学生時代の一番の思い出は、辛かった1年生の時の湯檜曾での初合宿くらいで、残念ながら試合で活躍した等の記憶はあまりない。

昭和39年に卒業、三菱化成(現三菱化学)に入社し北九州市の黒崎工場に配属、同工場サッ

サッカーと共に

昭和51年卒業の河内(ごうち)です。私がサッカーを始めたのは、都立西高校に入ってからのことですが、それから44年たった今でも、体の一部のように毎日の生活に活力を与えてくれる源です。今ではサッカーと日本人を切り離すことが難しくくらい、サッカーが日常化していると思いませんか。毎週のカレンダーを見てみると、月曜日は、欧州サッカーのハイライトがスポーツで流れます。水曜日と週末の深夜は、香川や宮市の出場するプレミアの試合を見ます。本田や長友の試合も、たまに見ます。リーグ・エスパニョーラや、ブンデスリーガの試合もいいですね。それから、2013年は、代表からも目が離せません。ブラジル大会予選も大詰めです、コンフェデ杯もありますね。

最後に、毎週土曜日は、五十雀の試合があります。地元の小学校の父兄を核にしたクラブチームで、神奈川県内のシニアリーグに所属しており、チームメートには、元日本代表の小柴(皇大OB)さんもいます。実は、小柴さんとは、学生時代に、関東1・2部の春季交流戦で、戦ったことがありますが。記憶では、やはり日本代表の確井さんなど、もいて、ボロ負けだったと思いますが。実は小柴さんとは、縁があって、小柴さんが監督されている県立鎌倉高校のサッカー部で次男が、3年間お世話になりました。その次男ですが、修人(じゅうと)と名付けたこともあって、好きでずっとサッカーを続けてくれています。今は、青学サッカー部のサテライトでやっています。何とか関東の公式戦に一試合でも出て欲しいと思う

カー部に入部した。チームの実力は日本リーグに加盟することになる八幡製鉄(現新日鐵住金)は別格として九州では1、2位を争うほどであった。なお、同部はJ2リーグ「ギラヴァンツ北九州」の前身である。幸い、入部して半年経った頃からセンターフォワードのポジションを得た。

黒崎工場サッカー部には昭和42年8月まで、約3年半在籍したが特に昭和40年には今までの想像もできなかったような経験をすることができた。全九州サッカー選手権大会では決勝で八幡製鉄と対戦、0・4で敗れた。八幡製鉄は宮本輝紀(後のメキシコオリンピック銅メダリスト)や上久雄(日本代表HB)等フルメンバーで、この結果は当然と言える。私を宮本、上選手がマークするような場面もあった。なお、こ

ていますが、なかなか競争は厳しいようです。今年は、最終学年なので、全試合、夫婦一緒に追っかけて応援するつもりです。このような状況で、仕事の合間をみてサッカーを楽しむというよりは、サッカーの予定をみて、仕事の日程を決めるといった生活を送っております。

さて、話題を変えて、サッカーをやっている人、話を聞いて、サッカーをやっている人が、音楽は、世界共通の言語だといいますが、サッカーも同じく、世界共通の言語だと言えるのではないのでしょうか。何度も経験していることですが、初めてあった外国人でも、サッカー大好き人間だと、百倍くらい早く、お互いが理解しあえるような気がします。

今勤めている米系企業のことですが、数年前に、スコットランド出身のPeeさんという方が新しいCFOとして着任した時のことです。始めに彼と話したのが、セルティックでの後輩の活躍の話でした。Peeさんは、ダンディーンシティー出身なので、ライバル関係なんですが、話が弾み、すっかり仲良くなることができました。

もうひとつ、やはり、今の勤務先の日本人の経理部長Angieさんは、イタリア出身で、住まいが近いこともあって、地元チームで、ボールを蹴る仲間ですが、こちらも、すぐ仲良くしてもらっています。また、外国人だけでなく、自分の上司だとか、取引先のキーマンとか、こういう話が、他にもいくつもあります。

ここで、技術について。面白いもので、我々の高校・大学時代でのサッカーは、まだまだ、キッ

の大会の一回戦ではヘディングによるハットトリックを達成、3・1の快勝に貢献した。この年全日本実業団選手権に替わり第一回全国社会人サッカー選手権が開かれた(於：別府)。我がチームも県代表として出場したが、一回戦で茨城日立に0・6で敗れた。秋には第20回岐阜国体が開催され、黒崎チームは九州代表として出場することができた。一回戦で不運にも優勝した大阪スポーツマンクラブに当たってしまい0・1の惜敗。私がGKと二対一になりながら決めきれなかったことが今でも悔やまれる。その後四日市工場に転勤、2年強同工場でプレーしたがその後支店勤務となったため、以来殆どボールを蹴ったことがない。古き良きサッカーの思い出である。

大橋 祥勝(昭和39年卒)

クアンドラッシュの時代だったと思うのですが、そこでやってきた我々自身(還暦間近の爺さん選手)も、近頃は、バルサまではいかなくてもパスをきっちり繋ぐことを目指しているようです。バルサのような素晴らしいサッカーが、できなくてもしてみたい、と思うんでしょうね。流行といいますが、情報化の影響は大きいと感じます。そんな中で、現役の若い選手にひとつだけ伝えたいのは、基本は、変わらないということ、また、基本を身に付けることが全てに優先することです。今の地元のチームには、若い頃、東邦チタニウムという関東社会人のチームのOBが何人かいるのですが、練習をしていると、自分のレベルと違ふと時々思うことがあります。ひとつはパスの受け方ですが、うまいと思う選手は、必ず、自分から、一歩でも迎えに行つてボールを受けるように体が自然に動いています。また、これも単純なことですが、バックからのボールを攻撃の選手が受ける時は、バックパスをするのではなく、まずゴールを向くこと、できれば、ワンタッチで、を考える。年をとると、なかなかこういうことが億劫になってきますが、彼らは、若いころの練習の賜物で、体に動作が刷り込まれていて、意識せず、こういうことができてしまう。とても、うらやましく思います。

最後に、これからの目標ですが、できるだけ、こういったサッカーとの付き合いを続けていきたいと思っています。来年は、定年を迎えるので、また、さらに、サッカーとの濃密な付き合い方を探したいと思っています。

河内 純一郎(昭和51年卒)

忘れ得ぬ試合

「ベストを尽くす」「全力を出し切る」――試合に臨んでよく言われることばである。

しかし90分間ベストを風切すことは個人でも難しい。ましてチームとしてやりきることは極めて困難なことだと思う。

長いサッカー人生で、チームとしてベストを尽くしたといえる試合がある。

今から50年余り前の昭和30年、小平で行われた三商大戦の対神戸大の試合である。メンバーは次のとおり。

GK	嶋田 英司	3年
RF	中路 信	3年
LF	福江 睦郎	4年
RH	馬場 猛	4年(故人)
CH	志摩 憲一	4年(主将)
LH	佐竹 明和	3年
RW	中田 鉄弥	2年
RI	日方 大三郎	2年(故人)
CF	橋本 昭一	4年
LI	中岡 敏雄	4年
LW	浅井 浩夫	3年

初戦の大阪市大に4対0で快勝した一橋は、こ



対神戸戦 勝利の後で (前列左が筆者)

関東西松会有志の会

●平成24年5月31日正午、一橋クラブ「一葉の間」にリアル・シニア有志12名の集まりで昼食・歓談会が開かれました。
参会者：奥村（昭21）、外岡（23）、高田菊（28）、神代（29）、石井・高田勝（30）、志摩・橋本・松丸（31）、浅井・佐竹（32）、岩坂（33）の各氏。その内、神代（山口）、佐竹（大阪）の両氏は遠路はるばるの参加です。

●この集まりの面々は写真のとおりです。それぞれが「落地成根、落葉帰根」の80年を超える己が生きた歴史をもつ顔です。また、数年間でしたが小平でボールを蹴りあったことから、同じ時代・舞台を共有しながら60年の連環的交友関係がキー

会の有志松西東西



関東西松会有志の面々（一橋クラブにて）

プできた仲間ともいえる顔です。

年一度ですが、一堂に会し近況などを語り合えるのが楽しみで如水会館まで足を運ぶのだという先輩のコメントもありました。

●本年も暑い夏に入る前にこの会を開く予定です。仲間として来し方行く末などを語り合うことができる集まりですから、年次に関係なく有志皆さんの是非の参加を期待しています。

松丸 鉦市（昭和31年卒）

世代超えてサッカー談義―

関西西松会

2012年も世話役の佐竹さんのご尽力で春、秋2回の懇親を深めることができました。平成卒も4名参加し、年代の差はますます広がるが、サッカーに対する情熱は変わらず、年の差に関係なく話が盛り上がるのは不思議なものだ。しかし、時間の速さは年齢に比例して早く過ぎていくようだ。

秋の会ではまず現役のリーグ戦での4連勝をお祝いし乾杯する。本年8月の神戸大学での三商大戦を見たところでは、率直に戦力も落ちたのではないかと少し心配もしたが、まずは喜ばしい（10月10日の話です）。

嶋田先輩には、毎週ネットでリーグ戦の結果を分析し、解説して頂いている。

松本先輩（陸軍士官学校より一橋）は相棒の篠宮先輩（海軍兵学校より一橋）が不参加で残念であったが、最近のなでしこの活躍に触れられ「大和なでしこがあるのに、最近、大和魂という言葉が聞けなくなったのは残念。大いに男性陣には奮起してほしい」と檄をとばされた。

インド、戸惑いの連続

「君インドに行ってくれ。事務所も無いので現地法人立ち上げてくれ。」

「えっ！何で私がー？」

5年前に突然インド行き的人事異動を上司から通達された。それまで海外駐在経験も無く海外出張もせいぜい東南アジア止まり、「沈まぬ太陽」の恩地元の姿をよぎる。強烈だったため「少し考えさせてください」と返事を保留し家内にも相談したが、特段反対もされず断る理屈も無

「戦後はサッカーという言葉も知らず、知人に勧められたが、ボートの一種かと思って入部したら、サッカーグラウンドへ行ったので驚いたとのこと、それから思えば現在のサッカー人気は隔世の感がある」とのこと。
松本先輩の元気の秘訣はお酒だそうで、小生は当日横に座らせていただき、杯の交換を重ねたが、こちらが先に酔ってしまっただ。とにかく毎回、松本先輩、篠宮先輩の戦後のサッカー談義を聞くのがたのしみだ。
神代先輩はいつも山口から駆けつけてくださり、感謝している。

村林先輩は「以前、ペルージャの中田をみた。イタリア・イングランドに比べればリーグのレベルはまだまだ低い」との酷評。
橋詰は共同通信に勤務し、今週はノベルウィークで忙しいところ、本日はたまたま日本人の受賞なく駆けつけられたとのことだ。

というふうに、サッカー談義を中心に「老若男男」の話が和気藹々と弾んでいく関西西松会にぜひ東京からもお越しください。
次回は2013年4月24日（水）、関西文化サロンです。

春の部（4月11日）参加者
松本（昭和26）、篠宮（27）、神代（29）、嶋田（32）、佐竹（32）、村林（40）、柴田（46）、宮脇（62）、櫻原（平成1）、岡本（3）

秋の部（10月10日）参加者

松本（昭和26）、神代（29）、嶋田（32）、佐竹（32）、村林（40）、柴田（46）、松沼（49）、橋詰（56）、岡本（平成3）、水沼（3）、本橋（4）
柴田 暁

（昭和46年卒、パナソニック勤務）

かなりの3日後YESの回答をした。

そこから既にインドに進出している商社の方には相当話を伺い、何とか待遇やサポート体制を人事や総務に認めさせたり、現地での事務所場所探しやローカルスタッフの新規採用等々、当初は2〜3年と言われた赴任期間は結局4年となったが、なかなか経験できないことをやらせてもらった。

さてインドは人口12億人でよく中国と比較されるが、世界最大の決められない民主主義国家でスローな巨象といった印象。GDP上は7〜8%

「VS神戸大@ニューヨーク」

現役時代三商大を目的とした関西遠征には何度か参加したが、神戸大学との試合はあまり記憶にない。大学の向かいに美味しそうなパン屋があったことは覚えているのだが、もっとも他の試合もあり覚えてなくて、大阪体育大学の灼熱のグラウンドとか関西学院大学の妙に喧嘩ばやいフォワードのことかをかろうじて思い出す程度だ。なにせ30年以上前のことである。ただ関学戦の記憶にはおまけがあって、会社の同期入社に関学サッカー部OBがいてなんこの試合に出ていたというのだ。彼によれば「一橋なんかに負けたら一生の恥だとみんな思っていて必死だった」らしい。

2011年6月から私はニューヨークで勤務しているのだが、この地で30年ぶりに神戸大との試合を経験した。種目はゴルフ。正確には如水会VS凌霄会（神戸大学同窓会）のニューヨーク支部ゴルフ対抗戦である。

ニューヨークのゴルフ環境は極めて良い。マンハッタンから車で30〜40分も走ればゴルフ場は山ほどある。グリーンフィーは日本よりかな

ゴルフで身体を、囲碁で頭を

30年間お世話になった東京海上退社後、関連の厚生年金基金、企業年金基金と年金関係の仕事で10年、その後先輩の縁で4年間IT関係の商社に勤務し、全ての仕事から離れて3年になる。引退後は、ボランティア的な仕事と好きな趣味の世界の中で自適の生活を送っているが、それをいくつか紹介したい。

1. 三菱サッカーリーグOB会の運営

三菱サッカーリーグは、60年以上の歴史を持つ

またインド人は言い訳の天才で湯水のごとくへ理屈が登場、真の原因の追求は不可能で根本的な対策は打てず常に応急処置となる。自分が原因でも「No Problem sir.」が口癖だし、自己主張は強く喋りっぱなしで辟易する。しかしながら実は根はいい人たちで、比較的親日で年配を敬い知らない者に対しても親切で本心に憎めない人たちでもある。まだまだ話題はあるが、あまりにもサッカーとは関係ない話なのでインドに興味がある方は別途、連絡頂きたい。

畑 弘志（昭和58年卒、日本鋼管勤務）

り安い。コースコンディションはピンキリだが概ねフツがきつくてグリーンが早い。ハーフの休憩なしで回るので時間が短い。電動カートでフェアウェイに入っていけるのでほとんど歩かないで済む（従ってあまり運動にならない）。
単身赴任の私は週末をほとんどゴルフ場で過ごしている。同年代の単身赴任者が多くゴルフ仲間には事欠かない。ラウンド数で日本にいた頃の3〜4倍はやってる善のだがなぜかスコアは良くない。恐らく一回一回の真剣さに欠けるためだと思う。いつでもできる気楽な環境だとゴルフは進歩しないものらしい。そんな私が唯一緊張して臨むゴルフが年一回の神戸大OBとの対抗戦なのである。



右手前が筆者

敗を競う。チーム内で上位6人に入らなければ何しに来たのかわからなくなる。どちらも大人の集団だけあってゲーム中は互いにボールを探し合うなどフレンドリーに振る舞うのだが、内心は真剣勝負の緊張感との戦いである。
特に初出場したおとしはその前年に1打差で惜敗していたためみんな目の色が違っていた。何とか7打差で勝利し優勝カップを取り戻し、去年はその勢いを駆ってなんと29打の大差をつけて2連覇した。レベルはどうあれ真剣勝負に勝利する爽快感はいくつになっても変わらない。試合当日は勿論、年が明けたつい先日この勝利を肴に皆で一杯やったくらいである（写真）。

ニューヨークでも一橋の卒業生は仲が良いことで有名なそうだが一緒に真剣勝負を戦った仲間とは更に絆が深まる。今も続いている学生時代の友人との付き合いがサッカー部の仲間に限られているのもそのせいだと思っているが、これは私だけのことだろうか。いずれにせよこの歳で真剣にスポーツに向き合える機会があることは幸せである。今年も3連覇を果たして皆で美酒を味わいたいと思っている。

島田 喜広（昭和59年卒 東京放送勤務）

三菱系企業のサッカーリーグ組織であり、現役選手時代は、公式戦を年間10試合程度戦ってきた。現役引退後は、全く試合から離れ、基本的にOB戦等の交流はなかった。30年位前に、銀行、商事、郵船、海上等のOBの努力により、OB会が発足した。

目的は、現役を離れても、ボールを蹴りあう機会を作り、お互いの懇親を深め合うことにある。年1回郵船飛田給グラウンドに集合し、OB同士で紅白戦を実施してきたが、ここ何年かは女子チームを招聘し、女子チームと戦うことにより華を添えてきた。今年で26回目になる。この組織の事務局に関わり始めてから6年目になる。

試合の準備、グラウンドの確保、住所録更新、案内状作成、懇親会の企画等準備に携わっているが、これが結構忙しい。いわば、ボランティア的な仕事ではあるが、OB選手のボールを蹴り合う楽しさや顔をみると苦労も吹き飛ぶ。ただし、60歳以上の高齢者の集まりであるので、毎年平均年齢が上がってゆくことと試合中の怪我がないかどうか心配の種でもある。

2. 趣味の世界

▼ゴルフ

20代後半からのゴルフ歴は40年位になる。現在、茨城GCのメンバーで週1回程度はゴルフを楽しんでいる。緑の芝生の中、野外でのプレーは爽快であり、又歩くことで健康維持にも役立っている。今後とも身体が続く限り楽しみたい。

▼囲碁

若い頃、親父の相手をするようになり、その後転勤等で30年以上も囲碁から離れていたが、サリーマン生活引退後、本格的に習い始めて3年以上になる。

同じ会社の同期の囲碁アマチュア6段者を先生に、同期6人と一緒に週1回、3時間程度教えを受けている。これ以外に、プロとの指導碁を月1回八重洲の日本棋院で受けている。お蔭様で、実力の程は別にしても、現在日本棋院の3段の免状を取得している。暑苦菜会、ぐう直会、大学OBの囲碁愛好会等に所属し、忙しいが、多いに対局を楽しんでいる。囲碁の魅力は、頭を使い、宇宙的で奥深いこと、囲碁を通じて仲間が増えることである。ゴルフで身体を使い、囲碁で頭を使う、この趣味を今後とも続けていきたい。

栗又 俊二（昭和42年卒）

ヌーメロセイ（背番号6）



一度だけ日本代表としてイタリアと戦ったことがある。1976年6月、場所は南イタリアの

ターラント。そうです、アウェイです。

新日鉄入社4年目、25歳の私は約3か月にわたる対イタリア製鉄技術協力団の「通訳」として身の置き所のない毎日を過ごしていた。ほぼ毎朝、日伊のエンジニア同士のミーティングがあり、日伊双方に通訳が付いている。日本側は私先は太ったおばさん。つまり日本語（私）英語（おばさん）イタリア語というやり取りをするのだ。でも（だから）△と言ったことが▲と伝わるこ

小平奮戦記

昭和33年卒業の岩坂です。

入学直後は、受験の疲れか、特に目標もなく級友と適当に付き合ひながら半年過ぎた。入部のきっかけは既にア式蹴球部に所属していた級友から、その年のシーズンも終わった11月に「おい、岩坂、何もするところがなかったらサッカーやってみないか」と誘われた。サッカーはもとより運動の経験も運神もなく、何の考えもなく入部することになった。高校時代の経験もなく歓迎される筈もなかった。

次期シーズンに向けて小平で練習が始まった。「サッカー入門」を購読してはみたが、さっぱりだった。練習はひたすらグラウンド周辺を走り、先輩始め仲間の後押しにより走っては蹴り、蹴っては走りの連続で楽しむ余裕はなかった。

蹴ったボールが玉川上水土手の雑木林に入り、たまたまクワガタミを見つけ、一瞬少年期の虫取りを思い出して「サイカチだ！サイカチだ！」と叫んだ。それが印象的だったのか志摩先輩（昭和31年卒）が名付け親となり、以後「サイカチ」と呼ばれるようになった。ほかに諸先輩の中にも、失礼だが渾名が面白おかしくうまくつけられた方がおられ、懐かしく、親しく思い出される。

練習試合に出場する機会も増えたが、うまさはなくキックアンドダッシュで敵陣に走り、蹴り返されてはウターンと、ポジションも一貫してハーフサイドだったから攻め・守りと思つて間もなかった。ボールが顔面に当たり一瞬真っ暗、みぞおちに当たっては一瞬息が止まりで、笛が鳴るのが待た遠しかった。

当時は試合中も練習中もバテルからの理由で「水

とぶらひは当たり前、数往復するうちに何が何だかわからなくなつて双方疲れ切つてしまつて。そうこうするうちにエンジニア達は、図面を添けてそれぞれがそれぞれの言葉をじかに喋る場がすつとミシシと気が付いた。もう通訳は要らないから議事録だけ書いて」と済まなそうに言われるまゝおまの時間はからなかった。

そんな中、ついに出番がきた。しかも主役級の！

イタリア側から親善サッカー試合をやろうという申し出がきたのだ。はじめ日本側は完全に腰を引いた。「いや、ボウリングやソフトボールなんてハナから無いんです。『郷に入つては郷に従ふ』というじゃないですか。勝ち負けは問題ではありませんが、向こうからの申し出に後を見せるのは卑怯です」などと押したり引いたりしてとうとう団長も「仕方ねえな」となった。

小平のほがしいんじゃないかと思うような土のグラ

を飲むことが許されず、さらに試合中は選手交代もなかったように思う。試合後、練習後の「ミズ」飲みから塩の吹き出たまま着替え、駅前で「牛乳」を飲んで、西荻で「サメコ」（蕨京亭）食へて、バイトに行った。「優」は20勝を目標に何とか勝越し、卒論はパッチワークで適当に捏ねあげ、就職は筆記もなく、サッカー部出身の先輩のスイセンと板回しで入社できて有難かった。入社後も試合に駆り出され、女子サッカーチームと対戦した事も懐かしい。

当時の花形スポーツは野球、相撲、ゴルフくらいだったが、昨今のサッカーや野球選手の欧米での心身とも見劣りしない活躍ぶりをみると正に隔世の感ありだ。現役時代の戦績は関東リーグ2部5位、国公立では優勝したと思う。個人では試合中にゴールエリア周辺



昭和32年 国公立大会（東工大にて）前列中央が著者

ウンドで、しかし周囲を「パパや夫の晴れ姿を見よう」というイタリア人家族応援団に隣接し、完全にアウェイの試合が始まった。始まってすぐ思った。「やっぱりよせばよかった」彼我の技術差は言語に絶した。我がチームは、私を除く全員がサッカーのユニフォームを着るのは生まれて初めてだったのに対し、敵は腹出たりとはいえ、頭禿たりとはいえ、斯界に冠たるイタリア人であった。

私は「かくなる上は武士らしく討死せん」みたいな気分になって、たまにボールが回つてくる絶望的ドリブル攻撃を繰り返した。まるで沖縄の敵艦に突っ込む特攻機のようなだった。

ふと気が付くと周りが同じイタリア語が聞こえてくるようになった。

「ヌーメロセイ、ヌーメロセイ」と言っているようだった。

岩坂 朔郎（昭和33年卒）

1年前のあの瞬間

現役のみさん、日々の練習お疲れ様です。平成24年卒の伊藤曉良と申します。現在は公務員として、愛知県庁で働いております。また、卒業して間もなく、自分が適任かはわかりませんが今回は自分にとって一番思い出に残っている「あの日・あの時」について書きたいと思います。

「あの日・あの時」とは、私が4年生の時に2部昇格を決めた時です。勝てば昇格決定という試合を引分け、他チームの結果次第では昇格が決まるので、ほとんどの部員と、藤ノ木で結果報告を待っていました。その時、手が届きそうになっている昇格に対する「期待」と、他に「不安」と「後悔」という、二つの感情を私は抱いていました。

私は、メンバーに選ばれず、リーグ戦はずっと応援にまわっていました。同点のまま、試合は終盤になり、勝ち越せば昇格、逆に相手点が決まれば、最終節まで昇格は持ち越し。私は、3年間このような状況を経験し、結局3部残留を味わってきました。

また昇格できないかもしれない、という「不安」が大きく、目の前の試合に集中できず、応援をやめてしまっている自分がいました。試合後、4年生という最上級生の立場として、やってはいけない行為であったという、「後悔」が残りました。結論的には、その日のうちに昇格を決めることができ、「不安」「喜

「ヌーメロセイ？ ナンバーシックス？ あ、俺の背番号じゃないか！」

イタリア人たちは、孤軍奮闘というか獅子奮迅というか八面六臂というか、とにかく頑張っているチビの背番号6を隣に思つてか、ひとときの、しかし満場の話のタネにしてくれているのだ。

試合中だったが、誇らしさに涙が出そうになった。

「ボールに頭突きなんかすると馬鹿になるからやめなさい」という母の声を振り切つてこの世界に入つて十数年、やめずにやってきたのはこの日のためではないかと思つた。

スコアは消れた。ユニフォームの色すら覚えていない。しかし、あの日の背番号が6だったことを一生忘れない。

押本 俊明（昭和48年卒、UEX）

「び」に変わったのですが、その時の「後悔」は今でも残っています。

昇格を味わえたとは言ってもなく、私の大学生活における最大の喜びでした。それだけではなく、今

仕事をやる上で、自分の行っている思考、それに基づく行動の大部分は部活で培ったものであり、4年間の部活動は今の自分を形作る非常に貴重な経験でした。現役部員の更新しているブログを、よく読ませてもらっています。サッカーに対する真摯な思い、勝利に対する執着心がまさかと伝わってきて、日々のエネルギーをもらっております。それと同時に、自分は今

どだけ頑張っているのかを、改めて考えさせてくれます。現役のみさんは、「1部昇格」という、大きな目標に向かって、がんばってほしい。春季・秋季のリーグ戦を観に行くのを今から心待ちにしております。

伊藤 曉良（平成24年卒、愛知県勤務）

四半世紀前の新入社員から学生諸君に贈るメッセージ

卒業以来、すでに四半世紀が経つ。

私が4年の頃は、日本経済がバブルの絶頂に向かう過程にあり、就職活動は完全な売り手市場だった。昨今はこの状況が逆転し、優秀な大学の学生諸君でも、楽な就活をしている訳ではなかつた。無論、諸君が就職できないということは、よほど素直でないか選り好みをしていない限りなかつたが、四半世紀前に比べれば、物理的にも精神的にも、就活の負担が重いに違いない。しかし、その負担のいくばくかは、視点を変えることで軽減されるかもしれない。

その視点とは、本質的に企業とは社員を搾取する存

在であり、最も搾取されているのは社員の中の最も弱者である新入社員だ、という認識である。

就職人気ランキングの上位には、今も四半世紀前も同様に、消費者に近く、業績が良いか高水準で安定している知名度の高い上場企業が並んでいる。こうした企業に入れば就活は成功で、そうでなければ失敗であるという価値観も広く共有されているようだ。

しかし、会社は本来利益を追求する組織なので《会社の粗利/人件費》という不等式を維持する。そして、良い会社ほどこの構図を確実にしている。すなわち諸君に人気の企業ほど、社員の稼いだ儲けを搾取しているのだ。諸君の稼いだ金は、膨大な広告費、重役の接待ゴルフ代、銀行の金利と株主への配当に消えてしまふ。

そして、抑えた人件費のしわ寄せは弱者が被る。有能で実績のある社員を搾取しすぎれば、会社に愛想を尽かして良い人から離れていく。会社としては、それは困る。だから弱者とは、辞められても痛手とならない新入社員に他ならない。

諸君には残念だろうが、これは最も合理的だ。なぜなら、会社にとって新卒採用自体が大きなリスクだから。新入社員が役立つかどうかは不確実なのに、今の法律では、役に立たないからといって正社員を簡単に解雇は切れない。ゆえに新入社員の給料は、会社の役に立たなくても差支えない程度の金額なのだ。当然、会社としての期待値も低いわけで、同期の中から何人か抜kindでた才能が出てくれば儲けものという程度だから、のっけから大事な仕事を任せるわけもなく、仕事のやりがいなど感じられないことが多いに違いない。

むしろ、新人のうちに心から仕事にやりがいを見いだせるようであれば、将来の幹部候補生になれる拔kindでた才能の持ち主だ。

一般論として、真にやりがいのある大きな仕事を新入社員がやっているとするれば、会社のリスタマネジメントとして大問題だ。良い会社の経営者が、会社の業績に大きな影響を与える仕事を、右も左もわからない新人に任せるような冒険はしない。それが会社というものだ。

それがわかれば、就職をこう考えてはいかがか？

どうせ、はじめは搾取され、つまらぬ仕事をさせられる身ならば、好きなことを仕事にするために就職するのだ。その仕事の延長に、25年後の成功した自分を描ける仕事を選ぶのだとして、その業界で自分を採ってくれるところに飛び込む。それが業界最下位の会社であっても構わない。業界の仕事を中心に習得してその業界に居続けられ、いずれ逆転のチャンスもあるというもの。人気ランキングは気にしない。上位であればあるほど、諸君は搾取されるのだから。

ではもし好きな仕事かわからなければどうするか？ 諸君が直面しうる最大のリスクは、就職が決まらずに卒業してしまうことである。翌年もほとんど優秀な学生が出てくる。大学入試と異なり、就活において一浪は間違いなくハンデになる。だから、どこでも入れるところに入れてもらおう。諸君が知らない優良な中小企業はいくらでもあるし、そんな会社では間違いない。諸君は真に期待される新入社員となるのだから。就職した会社がいわゆるブラック企業でも構わない。そこで逃げずにもがけば、苦勞した稀有な経験は、後年間違いなく諸君の飯のタネとなる。

四年生の就活は、本稿を書いている時点ですでに決着しているだろう。それぞれに、成功した、あるいは失敗したという思いが胸の中にはあつた。しかし、その思いは入社前にさっぱりと忘れ去るものだ。諸君は就活の成否にかかわらず、会社に入って最善を尽くさねばならない。会社や上司、先輩は、諸君をなかなか認めてはくれないだろう。しかし、新入社員は最も搾取され、最もつまらぬ仕事をさせられる存在だ、という視点をあらかじめ持つていれば、おそらく今後感じることもなる理不尽さや憤りとも、上手に付き合っている。

三年生以下の諸君は、是非とも評判の良い会社ではなく、やりたい仕事ができる会社を選んで欲しい。世の中の人気企業ではなく、自分の中のランキングでトップの会社を目指して就活に励んでもらいたい。自分が選んだという自覚と納得があれば、大抵の困難には立ち向かっていけるものだから。

なお、ここで紹介した視点は、私のオリジナルではなく、木坂健宜さんという若手コンサルタントによるものであることを申し添えておきます。

高見 理人（昭和62年卒）

編集後記

2月のOB戦で高峯氏（昭和43年卒）がクリンシュートを決めた。この日の最年長の鮮やかなプレーにとよめきがあがった。猪突ゴール猛進のスタイルは、スピードと黒髪を除けば40余年前の現役時代そのままだ。ひょっとしたら自分だって出来るかもしれないと元気をもらいました。

西松会新聞も6号になりました。土井前会長の肝いりでスタートしたこの企画も既に100人を超す会員からご投稿をいただき、交流を深める場としての役割を担ってきました。一方で現役のホームページや代表幹事による「小平通信」など新しいツールによる情報発信と交流の場も充実してきました。費用対効果も含め新たな形を構築する時かもしれません。皆さんのご提案を期待します。

（昭和41年卒、相良 保彦）